

## 編 輯 局 よ り

いよ々々“天界”も新體制に入つた。この一月號を、1ヶ月前の十二月初日に發行するやうに、誠に氣持ちが好い。ダブル・ナンバの問題も都合好く片づいた。この體裁と方針で、わが“天界”は、宇宙と共に、永く續かせたいものだ。

▲讀者諸君は去る十一月12日の水星の太陽面通過を首尾よく見られましたか？あの日、近畿や中國地方はスバラシイ天氣でしたよ。そして、京都でも、大阪でも、近江でも、倉敷でも、觀測は立派に成功しましたよ。▲太陽面通過のある毎に、こうした現象を最初に觀測した青年ホロクスを思ひ出す。ケプラーの計算を修正して、1639年十一月24日に金星通過が起るに違ひないと自信しながらも、(今と違つて、正しい天體曆の無い時代に)朝早くから何時起るかも知れない此の現象を見つめたなど、いぢらしい氣がする。僅か22歳で逝くなつた此の天才の片鱗を主筆の卷頭隨筆で讀み味はつて貰ひたい。▲四分儀座の流星群は毎年のことながら、御正月の晴ればれしさに、つい忘れて了はないで、熱心に觀測して貰ひたい。小楨氏の文は其の親心である。▲S. I. 氏の日本古代曆も愈々佳況に入る。之れは次號を以つて完結する筈である。▲長い間、編輯局の箱の中にしてしまつてあつた百濟氏の原稿を今こゝに出す。恐らく、百濟氏御自身も忘れてゐられるであらうが、編輯局は、誰の原稿に限らず、大切なものを、決して紛失することはない。昭和も15年になつて、之れくらゐの論文を、讀者の中には讀みこなす人もあらうと思ふ。▲フィッシャー博士の“極光”をよく味はつて讀んで頂きたい。之れは仲々、あの美しい現象を實際に見た人でなければ書けない文章です。しかし、極光は、決して、北歐や北米あたりでのみ見えるものではない。我が國でも、京都の近くで、昔しから、既に數十回見えた“赤氣”の記録があるのだから、今後も亦可なり頻繁に見えるに違ひない。殊に、今は北滿や樺太あたりに同胞も澤山住んでゐられるのだから、日本人として極光を見る機會は非常に多いのである。(編輯の都合で之は急に次號まはしと變更)▲來年(1941年)一年間の日月五遊星の離角圖を第29ページに載せた。之れは毎年出してゐるものなのだから、説明は殆ど不必要と思ふ。各遊星が、太陽から西や東へ日々どれほど離れてゐるかといふことを、時間で表はしたものである。▲吾々は既に1942年の天文曆も有つてゐるのであるから、その1942年の略曆表や遊星圖を此の號に出すつもりであつたが、上記の1941年のものと混雜する心配があるので、其れは次號に譲ることにした。